

SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

ワンス・アポン・ア・タイム・ イン・ザ・ウェスト

1968年/イタリア・アメリカ映画

配給：アーク・フィルムズ/boid インターフィルム/165分

2019 (令和元) 年10月2日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・原案・脚本：セルジオ・レオーネ

原案：ベルナルド・ベルトルッチ/
ダリオ・アルジェント

脚本：セルジオ・ドナーティ

音楽作曲・指揮：エンニオ・モリコーネ

出演：クラウディア・カルディナーレ/
ヘンリー・フォンダ/ジ

エイソン・ロバース/チャー

ルズ・ブロンソン/ガブリエ

レ・フェルゼッティ

👁️👁️ みどころ

1969年に『ウエスタン』の邦題で公開された、巨匠・セルジオ・レオーネ監督の、原題『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』が、50年後の今、レオーネ生誕90年、没後30年で公開。しかも、2時間45分の完全オリジナル版だ。劇場公開と並行して、BSプレミアムでは『ウエスタン』も放映されたから、比較対照すれば、なお興味深い。

大ヒットした「マカロニ・ウェスタン」3部作後の本格的西部劇のヒロインは、何とクラウディア・カルディナーレ。さらに、“アメリカの良心の象徴”と呼ばれるヘンリー・フォンダが悪役で！そんな俳優起用の妙の中、ハーモニカ男を演じるチャールズ・ブロンソンの、三船敏郎ばり(?)の寡黙な演技にも注目！

ストーリーの軸は、「モリカケ」と同じ公共事業に絡む利権問題。そう言ってしまうと身もふたもないが、50年前の名作がいかに色褪せない輝きを放ち続けているかを、タップリと味わいたい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■なぜ今、50年前の名作西部劇が日本で公開？■□■

イタリアの巨匠セルジオ・レオーネは、マカロニ・ウェスタンの産みの親。『荒野の用心棒』(64年)、『夕陽のガンマン』(65年)、『続・夕陽のガンマン/地獄の決斗』(66年)で3年連続イタリア年間興行収入NO. 1を記録し、全世界にイタリア製西部劇=マカロニ・ウェスタンブームを巻き起こした巨匠だ。そんなセルジオ・レオーネ監督が、「アクションの面白さを極め尽くした前3部作とは大きく方向性を変え、自らの作家性を前面に打ち出

した野心作」が本作で、「それまでのマカロニ・ウエスタンとも、ハリウッド製西部劇ともまったく似て非なる異形の超大作として造形」したというのが本作の売りだ。ところが、本作は、フランスを中心にヨーロッパでは大ヒットしたものの、アメリカではなぜかまったく理解されず、20分短縮され、批評、興行とも惨敗したらしい。そして、日本では米公開版をさらにカットした2時間21分版が公開され、アメリカ同様批評家から無視されたらしい。

1969年といえば、私がそれまでのめり込んでいた学生運動から一步退き始めた時期で、映画好きの私はそれなりの情報を持っていたが、寡聞にして本作のことは全く知らなかった。しかし、初公開から50年、レオーネ生誕90年、没後30年の今、セルジオ・レオーネ監督の『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』が2時間45分のオリジナル版で日本初公開されることに！それは一体なぜ？それは私にはわからないが、理由の1つはきっと、「この作品を見て映画監督になろうと思った」と語っているクエンティン・タランティーノ監督の最新作『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（19年）が公開されたため。つまり、同作が描いた1969年のハリウッドが、映画ファンに懐かしく思い出されたためだ。「むかしむかし、あるところに・・・」と語り始める物語は、おとぎ話に限らず何かと興味深いものだ。

しかして、セルジオ・レオーネ監督が、1968年の時点で「むかしむかし、西部では・・・」と語り始めた大陸横断鉄道敷設時代の西部劇とは？

■□■原題vs邦題。劇場版vsTV版。165分vs141分■□■

『キネマ旬報』10月上旬特別号は66頁から73頁にわたって『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』の特集を組み、①芝山幹郎氏（評論家）の「レオーネ的快楽を堪能する」、②岡村尚人氏（宣伝プロデューサー）の『ワンス・アポン・ア・タイム・イン〜』の原点はこの『〜イン・ザ・ウェスト』だ」、③鬼塚大輔氏の「1969年、なぜこの西部劇が理解されなかったのか」という3本の解説を載せている。そこで書かれている造詣の深い分析はいずれも必読だが、面白いのは、②の解説。そこには、『ウエスタン』という身もふたもない邦題は、なかばヤケクソ気味に付けられたんじゃないだろうか。」と書かれている。また、「今回2時間45分オリジナル版の劇場初公開を機に改題し、映画史の中で『ワンス・アポン・ア・タイム〜』と題された数々の作品の原点が、この『〜イン・ザ・ウェスト』であると示すことが、再公開するにあたっての重要な意義と考えた。」と書かれている。

他方、私は本作を10月2日に観たが、その宣伝のためか、10月1日にはBSプレミアムで『ウエスタン』がTV放映された。私が劇場で観たのは、今回日本初公開された『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウェスト』で、2時間45分版だが、TV版は1969年に日本で公開された邦題『ウエスタン』で、オリジナル版から24分カットされ

た141分版だ。編集でどこをどうカットしているかは両者を比べれば明白だが、比べてみると、やはりオリジナル版のすごさがよくわかる。もちろん、劇場での大型スクリーンと、自宅での60インチTVとの違いもあるが、やはり違いはそれだけではない。

1969年の学生時代は時間的余裕がなく観られなかったが、50年後の今、70歳になってこんな名作の完全オリジナル版を劇場の大スクリーンで鑑賞できたことに感謝。しかも、1日違いのTV放映で『ウエスタン』との対比までできたことにも感謝。

■クローズアップの迫力と寡黙な演技の迫力に注目！■

クリント・イーストウッドが演じたマカロニ・ウエスタンの主人公は、それまでの正統派ハリウッド西部劇とは全く異質の雰囲気が際立っていた。服装も汚いし、女にも優しくないから、とても子供たちが「これぞヒーロー！」と思えるような主人公ではなかった。しかし、葉巻を啜えたニヒルな表情と、どんな残忍な行為にも耐える根性は大了もので、ボロボロにされながら最後には“勝者”になっていた。前述したとおり、セルジオ・レオーネ監督は『フンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ウエスト』と題した本作で、そんなマカロニ・ウエスタンとも、従来のハリウッド製西部劇とも違うレオーネ流の独自の西部劇を目指したが、アメリカ大陸横断鉄道敷設時代のアメリカ西部を舞台とした、本作冒頭に登場するガンマンたちのひげもじゃぶりやトレンチコートを基調とした汚い服装はマカロニ・ウエスタンの雰囲気と同じだ。

ある鉄道の駅で年老いた駅員を脅かし殺してしまう3人組のガンマンたちのガラの悪さは、とても正統派西部劇とは思えない。また、その直後に見せてくれる、ハーモニカ男と呼ばれる主人公（チャールズ・ブロンソン）と3人のガンマンとの“早撃ち決闘”もクローズアップを多用している分だけ迫力が増している。また、もともと寡黙な男たちが早撃ちに熱中しているため余計寡黙になるのは当然だが、そこでは「馬が1頭足りないようだ」「いや、2頭多すぎる」という会話が何とも絶妙だ。本作導入部では、そんなクローズアップの迫力と寡黙な演技の迫力に注目しながら、1対3の“早撃ち決闘”の勝敗をじっくり確認したい。しかし、本作におけるこの男たちの位置づけは？

■なぜかクラウディア・カルディナーレがヒロイン役に！■

1960年代に、ブリジット・バルドー（BB）、マリリン・モンロー（MM）らと共に、CCと呼ばれたイタリアのセクシー女優がクラウディア・カルディナーレ。その代表作は、ルキノ・ヴィスコンティ監督の傑作『山猫』（63年）だ。バート・ランカスター、アラン・ドロンと共演した当時25歳の彼女の美しさは抜群だった。同作のタイトル「山猫」は、シチリアの名門貴族サリーナ公爵家の紋章を飾る動物を意味するもの。イタリアが近代国家として統一されていく最中の、1860年代のシチリア島が舞台だ。日本では1868年の明治維新によって、250年間続いた徳川時代の武士階級は滅びてしまったが、それ

と同じように、シチリアでは貴族がその特権を失う運命になっていた。そんな時代を描いた同作ラストの、ホンモノの貴族の館を使い、多くの俳優とエキストラを使った舞踏会の豪華絢爛なシークエンスはうっとりさせられるものだった（『シネマ 38』未掲載）。そんな『山猫』のヒロインを演じたクラウド・カルディナーレが、なぜか西部劇である本作でもヒロイン役に！

導入部の“早撃ち決闘”の後、列車から降り立つのがクラウド・カルディナーレ扮するジル・マクベイン。東部のニューオリンズの高級娼婦だったジルは、どうやらブレット・マクベイン（フランク・ウルフ）からの求婚を受けて、彼が現在西部で開拓している「スウィート・ウォーター」と称する広大な農地まで、1人で鉄道に乗って嫁いできたらしい。ところが、駅でいくら待ってもマクベインが現れないから、仕方なくジルは馬車を雇ってスウィート・ウォーターまで行くことに。しかし、なぜマクベインは花嫁を駅まで迎えに来なかったの？それは、花嫁の来訪を子供たちと共に待ち受けていたマクベイン家に、一家惨殺の悲劇が起きたためだ。そんな状況下、やっとマクベイン家に到着したジルは、そんな惨劇の後を見て、いかなる決断を？

彼女がまず最初にこの西部の地で行ったのは夫とその子供たちの葬儀だったが、婚姻届は既にニューオリンズで1ヶ月前に済ませていたらしい。そのため、ジルはブレットの広大な土地をはじめとする財産を1人で相続することになったが、それって幸運？それとも・・・？本作では男たち全員が寡黙だが、ジルも寡黙。しかし、いかにも意思の強そうな大きな目を見れば、大都会の東部ニューオリンズからまだインディアンがいる未開拓の西部にジルが1人でやってきたことの意味がよくわかる。さあ、ヒロイン・ジルは本作でどんな数奇な運命をたどっていくのだろうか？

■□■こいつは悪役！てっきりそう思ったが・・・■□■

導入部から複数で登場してくる汚い服装のガンマンたちのボスが、シャイアン（ジェイソン・ロバーズ）だ。冒頭で改札係の老人を殺したのがその一味なら、ブレットの家を襲い、マクベイン一家を皆殺しにしたのもその一味だ。シャイアンはそれらのシークエンスの後に、酒場と交易所を兼ねた小さな小屋に、手錠姿で入ってくる。その直前の発砲音から状況を判断すると、どうやら彼は移送中に脱走を図りそれを成功させたようで、小屋の中に入ってきた彼は囚人とは思えないほど堂々としている。そこで、ある男の拳銃の弾丸で自分の手錠をぶっ壊したシャイアンが、夫の下に向かっている新妻のジルや、先に小屋に入っていたハーモニック男と初の“ご対面”をするわけだが、ここではシャイアンの悪人ぶりが際立っている。

人間、顔や服装だけで善人か悪人かの判断をしてはならないことは常識だが、このシャイアンを見ていると、誰だって、こりゃ生まれつきの悪人！そう思ってしまう。たしかにそうなのかもしれないが、物語が進んでいくと、この男は意外に善人・・・？それは、冷

酷非道の殺し屋フランク（ヘンリー・フォンダ）と対比すると余計にハッキリしてくるから、本作ではそれにも注目しながら、シャイアの果たす役割をしっかりと確認したい。

ちなみに、この小屋の雰囲気はどこかで観た映画にそっくり！そう、本作のこのシーンはクエンティン・タランティーノ監督が面白い密室劇、推理劇だった『ヘイトフル・エイト』（15年）（『シネマ37』40頁）の脚本を書き、監督をするについての元になったものらしい。前述した芝山幹郎氏の解説には、本作に込められているたぐさんのこだわりが紹介されているので、合わせてそれもしっかりと勉強したい。

■何とヘンリー・フォンダが初の悪役に！■

46年も映画の世界で生きられて幸せです。1981年の第53回アカデミー賞の授賞式で名誉賞に輝いたヘンリー・フォンダは、こみ上げる感動をそう表現したらしい。彼の代表作は『怒りの葡萄』（40年）、『荒野の決闘』（46年）等たくさんあるが、何と言ってもシドニー・ルメット監督の『十二人の怒れる男』（57年）がそのトップ。彼は、多くの映画で“気骨ある高潔な男”を好演し、“アメリカの良心の象徴”といわれた名優だ。ところが、セルジオ・レオーネ監督は本作で、そのヘンリー・フォンダを冷酷非道の殺し屋フランク役にはじめて悪役として起用したから、世間はビックリ！

導入部でマクベイン一家の惨殺を主導した男は、1人だけ残された幼い弟を前に、手下の1人から、「フランクどうする？」と言われ、「名前を聞かれた」ために、その男の子まで射殺してしまうことに。そんな冷酷な男がヘンリー・フォンダ扮するフランクだが、フランクは太平洋の荒波が見えるところまで鉄道の敷設のために邁進している“鉄道王”モートン（ガブリエレ・フェルゼッティ）の片腕だ。しかして、フランク率いる一団がマクベイン一家を惨殺したのは何のため？また、それをシャイアン一味の仕業と見せかけたのは何のため？

結核の末期症状にあり、松葉杖を使わなければ歩けない状態になっているモートンは、自らをビジネスマンと称し、金を使って事業を成功させる手腕に長けていると自負していたが、最近、片腕だったはずのフランクの態度がデカくなり、銃を使っての何かと乱暴な行動が目にも余らしい。マクベイン一家の扱いに関して、モートンがフランクに下した指示は「脅かしてやれ！」だったのに、フランクはなぜ一家全員を殺害するまでの非道な行動に？さらに、そもそもモートンがマクベイン一家を脅かそうとしたのは一体何のため？

先日観た『任侠学園』（19年）では、ボロボロになり再生が必要と判断された某学園の立て直しのため、西田敏行・西島秀俊コンビの阿岐本組が乗り込んだが、悪徳父兄の実力者がひそかに、その学園の乗っ取りを狙っていた。それは、彼がこの学園が高速道路の路線にあるとの秘密情報を得ていたためだ。これを見ても、公共事業を巡る利権構造は、いつも人間の欲望を巡るストーリーに使われていることがわかるが、さて、鉄道王モートンの思惑は？そして、そのNO. 2であるフランクの思惑は？

■□■物語の軸はモリカケと同じ！キーワードはSTATION！■□■

探偵モノ、推理モノは、シャーロック・ホームズにしる、金田一耕助にしる、複雑かつ難解な事件をどこかで「謎解き」してくれるから、それを聞いていると、ストーリーの全貌を理解することができる。しかし、本作はあくまで西部劇で、探偵モノ、推理モノではないから、導入部のマクベイン一家惨殺事件は、誰が何を狙ったものかについて解説してくれる人はいない。しかし、2時間45分のストーリー全体を目を凝らして観ていけば、本作の物語の軸は、近時日本中を揺るがした、あの「モリカケ問題」と同じだということがよくわかる。つまり、公共事業に伴う用地買収の利権と、それを誰がどう付度するかという問題だ。そして、そんな物語を象徴する本作のキーワードは「STATION」だ。そのことは、ジルがマクベイン亡き後の家の中から、大切にしまっていたSTATIONの模型を発見するシーンに象徴されているので、それに注目！

本作導入部では、馬車に乗ったジルが駅からスウィート・ウォーターに向かって走る時の周辺の風景が実に美しい。これは、私が2001年の中国の西安旅行の際、敦煌まで足を延ばした時の風景にそっくりだが、そんなところで今、大陸横断鉄道の敷設工事が進んでいることにビックリ。また本作では、冒頭からラストまで、物語の節目節目に大陸横断鉄道の敷設工場の風景が登場する。そこでは、華僑を含む大量の低賃金労働者が動員されていたはずだが、本作を観ていると、そのエネルギーの大きさがひしひしと伝わってくる。これだけの大事業だから、それに絡む利権も巨大で、それは「モリカケ」の比でないことは明らかだ。しかして、アイルランドからの移民であるマクベインは、西部の荒地320エーカーを安く購入し、それを家族だけの力で開拓していたらしい。彼は、自分の土地を「スウィート・ウォーター」と称していたが、ジルが乗った馬車の御者の言葉によると、そこは、水などあるはずのない荒地らしい。しかし、マクベインがSTATIONの模型を大切にしまっていたことを見ると、彼の計算と野望は・・・？

それをしっかり見抜いたのが、あのハーモニカ男だった。彼は、弁護士顔負けの書類の調査等も進めていくので、それにも注目！もしスウィート・ウォーターにSTATIONが完成し、そこを大陸横断鉄道が通ることになれば、マクベインが所有する320エーカーの土地の価値はHOW MUCH？

■□■ハーモニカ男は一体誰？それは最後にやっと！■□■

チャールズ・ブロンソンは、『荒野の七人』(60年)、『大脱走』(63年)、さらには『さらば友よ』(68年)、『レッド・サン』(71年)等で有名なハリウッドスターだが、何といっても、一世を風靡した男性化粧用品「マンダム」のテレビコマーシャルが有名。日本人俳優では、三船敏郎が「男は黙って・・・」を代表するイメージ・キャラクターだが、外国人俳優でそれとそっくりなのがチャールズ・ブロンソンだ。そう考えると、セルジオ・レオ

一ネ監督が本作のハーモニカ男に彼を起用したのは大正解！もともと寡黙なうえに、「要点はハーモニカの音色で」語っていくハーモニカ男に、本作導入部では強盗団のボスであるシャイアンが大きく混乱させられていくところも面白い。

このハーモニカ男は神出鬼没だから、マクベインの家に1人で住んでいるジルも相当困惑させられたはずだ。もっとも、このハーモニカ男のことが一番気になるのはフランク。自分に敵対していることだけは確かだが、それはなぜ？そもそも、この男は誰で、どこからやって来たの？それがサッパリわからないのだから、フランクはこの男が気になって仕方がないらしい。シャイアンも当初はハーモニカ男を敵だと思っていたようだが、鉄道王のモートンが根城にしている機関車の上に忍び込んでいるハーモニカ男をシャイアンが救い出した(?)ところから、この2人の間には奇妙な友情のようなものが芽生え始めるので、それにも注目！

荒くれ男たちが先を争って土地を開拓し、利権をむさぼっていく西部開拓史の時代では、保安官がいてもあまり当てにできないから、男たちは拳銃の腕前(早撃ち)が頼り。しかし、チャールズ・ブロンソン扮するハーモニカ男は、導入部ではシャイアンが静かに監視しているシーンでその早撃ちの腕前を披露したものの、大部分は寡黙でハーモニカを吹いているだけだから、気味が悪い。しかも、この男がどこの誰なのかを誰も知らないから、なおさらだ。さらに、この男はストーリーのあらゆるところに顔を出し、謎の行動をしたままで消えていくから、その点セルジオ・レオーネ監督の脚本作りもお見事だ。もっとも、前述したように、中盤以降は本作のストーリーの軸が大陸横断鉄道の敷設とモートンによる土地買収を巡る利権問題にあることがわかってくるので、それを巡るハーモニカ男の行動の意味も少しずつ見えてくる。そこで面白いのは、マクベインの土地を、競売でわずか5000ドルで競落したハーモニカ男が、カネにも土地にも執着しないこと。すると、彼の狙いは一体ナニ？それは本作ラストで一気に見えてくるので、それに注目！

黒澤明監督の『用心棒』(61年)は、三船敏郎扮する桑畑三十郎と仲代達矢扮する新田卯之助との対決がクライマックスだったが、さて本作は？ハーモニカ男が常にハーモニカを持ち歩き、何かを語るように吹いていたのは、一体なぜ？そして、ハーモニカ男がフランクの前に突如登場してきたのは、一体なぜ？それは、あなた自身の目でしっかりと。また本作では、そんな『OK牧場の決斗』(57年)や『シェーン』(53年)のラストシーンのような“美学”とは別に、ただ1人スウィート・ウォーターに残り、そこで建設される「STATION」の完成に向けて、ジルがいかに輝きながら働いているかにも注目！2時間45分の大満足をありがとう。

2019(令和元)年10月10日記